
ヤミ負いのナビト

八号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤミ負いのナビト

【Nコード】

N8624T

【作者名】

八号

【あらすじ】

鬼は怪異の拠り所であり、鬼門は鬼等の世界である異界とこちら世とを繋ぐ場所であった。これは鬼と語らうために名と、禍々しい黒い痣、そして記憶を受け継いで生きる運命を負ったナビトという者の物語。

杯島の鬼【一】（前書き）

杯島の鬼は数年前に書き上げた作品です。作中描写はありませんが、津波を連想させる大波という言葉が物語の重要な部分にあります。先の大地震のこともあり、気分を害される方があるかもしれません。わたし自身は決して被災者の方を揶揄するような意図を持って書いたのではないことを分かって頂けるとありがたいです。

なお、作中血なまぐさい描写がわずかですがありますので、苦手な方はご注意ください。

数年前に某賞へ投稿したものを修正した作品となっております。

杯島の鬼【一】

鬼は怪異の抛り所であると。

鬼には鬼らの世界があり、鬼らは己に定められた決まりごとに従って動くのだと。

人はそれに従う他にできる術などないのだと。

彼の人はそう語った。

そして、『我ら』の役目は彼らの棲み処たる異界と、人の住処たるこちら世とを繋ぐ鬼門を祀ることであるとも。

彼の人はナビトと名乗った。そうして名乗った後に、「おかしな名だろう?」とはにかなり見せた。

「いや、名前よりも」そう言いかけて俺はやめた。その続きを語らないくらいに分別はあるつもりだったからだ。

我らは鬼と語らうためにある。

その名と、記憶と、呪を受け継ぐために生きるのだ。

小船は波に合わせて大きく揺れた。

鈴村の生家は山に囲まれた農村にあつて、子どもの時分から海に所縁のある生活をしてはこなかったために、船に乗る度に「馴染めないなあ」と感じていた。

ふわふわと自分の体が揺れるのにこめかみを痛めながら、隣に腰を下ろしている男をちらりと盗み見れば、鈴村とは対照的に涼しい顔をして小船の向かう先を眺めている。纏った旅装束は黒が色褪せていて鉛色。渋味の混じったその色には、風雨月日に晒されてきたのだろううことを感じさせられるのだが、一步引いてみればこの男、まだ随分と若かった。

以前鈴村が年を訊ねた際には「十八」と答えたので、まだ二十に

はなつていないだろう。眉を少しも動かさない能面のような完璧なる無表情と全てを悟りきつたような色の暗い瞳、そしてわずかに幼さの残る顔立ちは、男にどこかちぐはぐな印象を与えていた。

男は名をナビトと言う。それは、親から与えられた名ではない。

小船を操る青年は、ナビトと同じ年頃のものであった。日に焼けた腕をむき出しにして、慣れた様子で櫂を捌きつつも、ナビトをじろじろと見つめている。ナビト自身は気にした素振りなどまるでなかったが、青年があまりにも不躰に見るものだから鈴村の方が苦笑いを浮かべてしまった。

原因はナビトの容姿に違いない。

ナビトには左頬から左手にかけて大きな黒い痣があった。暗がりで見たらその痣はさぞかし恐ろしいだろうなと鈴村は思う。痣が頬に点々と散る様はまるで返り血のようで、着物の袖から覗く手は血で血を洗ったように爪まで染まっている。あからさまな禍々しさを持ったその痣は、ナビトの肌の上で存在を主張していた。人目を引かぬはずもない。

鈴村もナビトと初めて対面した時は、まじまじと痣に見入ってしまったものだった。であるから、青年の不躰な視線も無理からぬことと言えばそうなのかもしれないが、かつての自分の粗相を眺めているような、尻がむず痒いような、そんな気持ちになるのだった。ナビトの方はと言えば、そういった無礼な視線にはもう諦めに近いものを感じているのかもしれない。

「ナビト、あれが杯島だ」

結局、鈴村の方が青年の視線に耐えられなくなってナビトへ声をかけた。

指差した先には濃紺の海の中、なだらかな丘のような形をした島がぼつんと浮かでいた。この島、裏に回って見れば、その半分がごつそりと削り取られたような断崖絶壁となっている。真上から見た姿が“まるで杯のようだ”というのが杯島という名の由来らしい。

「壮さん」

ナビトは鈴村のことを壮さんと呼んでいた。鈴村壮介だから、壮さんだ。

「島が唄っているな」

それはまるで言葉を噛み締めるような呟きだった。その呟きに「ああ」と応じ、鈴村は耳をすます。波の音の隙間から、やわらかく届く旋律がある。ともすれば風の音と違ってしまいそうになるほど細い音色なのに、はつきりと耳に届く。人の声ではない、けれどどこか懐かしい響き。その唄は、確かに杯島から聞こえているのだ。た。

「島が唄っているだろう。ありえないことだ」

郷愁を誘う旋律に耳を傾けながら何となしに答えた鈴村に、ナビトは「ありえないなんて、人の判断できるところではないさ」と抑揚のない声で返した。まるで翁のような語り方をするナビトに、船頭の青年はただただ、年相応の訝しげな表情を浮かべ、首を傾げていた。

島へ着き、船から降りると、若い女が浜まで鈴村達を迎えに来ていた。頬にそばかすがばらばらと散ってはいたが、地が浅黒いのであまり目立たない。二重瞼がはつきりとしていて、整った美しい顔立ちをしていた。背中に朱色の帯で赤子を負っている。女が赤子をあやす素振りを見ながら横目でナビトの痣を盗み見て、安堵したように息を吐き出したのに鈴村は気が付いていた。ナビトも、気付いていただろう。

「迎えに来てくれたのか」

鈴村が片手を挙げてそう声をかけると、女は背の赤子を気遣いながら浅く頭を下げた。

「島に居る間世話になっているんだ。彼女はこの島の門守だよ」

「ひなたと申します」

それにナビトはただ小さく頷いて見せただけだった。言葉がないのは興味がない、との意思表示にも思える。

鈴村はやれやれと肩をすくめながら、ひなたへ「彼がナビトだ」

と紹介した。紹介したものの、その後に言葉が続かない。ただ名前を告げただけだった。

鈴村自身ナビトを「友人」と呼ぶようになって久しいが、ナビトがナビトである以上のことを知ってはいない。ナビトが進んで語るようなこともなかった。例えば、生まれは何処であるとか、家族は居るのかだとか、ナビトと名乗る以前はどのような名だったのかだとか、そういったことだ。しかしながら、現在の関係を作り上げるのに必要な事柄ではなかったのは事実だったので、今まで訊ねてはこなかった。

鈴村のあつさりとした紹介にひなたは「はあ」と首を捻ったが、それ以上訊ねることもなかった。どこかそわそわと落ち着きのない様子は隠しようもなく、「立ち話もなんですから」と言った声音には妙な焦りがあった。

ひなたの家は島の集落がからは少し離れた竹林の中にある。浜からは半刻とはかかない距離で、ひなたが前を行き、鈴村とナビトがその後が続いて歩いた。

家までの道中、ひなたに負われていた赤子は、丸いころころとした両の目で後ろを歩くナビトをじっと見つめていた。大人の視線とは違い、赤子の視線というものは実に純粹だ。初めて見るものに対しての興味以外他意がない。船頭の青年の時とは違い、居心地の悪い思いをせずに済む。鈴村は微笑ましく思いながら赤子に目尻を下げていたが、隣を歩いてきたナビトは、何故だか赤子の視線から逃れるように道中ずつと俯いたままであった。

ひなたの屋敷はその辺りの家屋の様式には珍しく、屋根裏部屋を持った造りであった。もともと書物を収めるために作った空間だったのだろうが、巻物などは収まり切らなかつたようで、一階に備え付けられた書棚にも並べられていた。

足を洗って家へ上がると、ナビトはひなたに勧められるままに腰を下ろした。鈴村は少し考えた後、ひなたと同様にナビトへ対面する位置へ腰を下ろした。

赤子を部屋の隅へ寝かし付け、戻って来たひなたは「改めまして、遠路遙々ようこそお越しくございました」と恭しく手をついた。ひなたが頭を上げるのを待ってから、鈴村は「着いたばかりでさっそくだが」と話を切り出した。

「ナビト、俺がお前を呼んだ理由はもう分かっていると思うが、他にもないこの唄う島についてなんだ」

ナビトはやはり無表情を顔に貼り付けていたが、着物の襟を直し、正座をして話を聞く姿勢を作った。短い所作であったが、実に洗練されていて、まっすぐに伸ばされた背筋にはどこか育ちの良さが感じられた。

「お前に知恵を借りたいのだ」

鈴村が杯島を訪れたのは今から半年ほど前のことで、島が唄い始めたのはそこからさらに二月さかのぼる。国の機関である陰陽寮から命を受けて各地の鬼門を探査する門守（門守は以前は単に鬼門を祀る人間のことを指したが、現在においては鬼門を探す国の役職を指す）であった鈴村は、唄う島の話聞きつけてすぐに島へ向かう小船を手配した。

島が唄っていると知ってやって来た鈴村を、島民達は一様に怪しんだ。島が唄い始めることは今回が初めてではなかったからだ。

実に二百年という時の間に一度、島は唄ってきたという。とても穏やかな旋律だが、その唄が三月あまり続いた後に、大波が島を襲うことは島民であるならば誰もが知ったことであった。

大波は、人も家も畑も全て呑み込み、押し流してしまふ。それほどまでに巨大な力で押し寄せても、波は決まって杯島だけを呑み込み、本土まで及ぶことはなかった。それを知って島を訪れる者など物好きか愚か者くらいだろう。島民のそのような見解は恐らく間違っていない。

鈴村は半月前にひなたから聞かされた話をそのままにナビトへ語って聞かせた。

鈴村が語っている間、ナビトは時折頷くのみで、黙って話を聞

いていたのだが、一通り話終わったと見ると、すぐさま口を開いた。「大波の話も含めて、その話が本当ならば、もうすぐ島が唄い出して三月経つのではないか？」

そうしてひなたの方へ顔を向ける。

「なのに、集落にはまだ大勢人の暮らしている気配があつたし、あんなもこの島を離れる準備をしているようには見えない。まさかとは思つが、島と一緒に心中するつもりなのか？」

この島へ足を運び、大波の話をひなたから聞かされた時、鈴村も同じ問いかけをした。勿論、島民もひなたもこのまま大波に吞まれて死ぬつもりはく、今回もひなたの首は横に振られた。

島民がこの島を離れない理由を知つたからこそ、鈴村はナビトをこの島へ呼んだのだ。

「実は前回、島が唄つた際に大波は来なかつたのです」

ひなたは膝の上で両手を組み、おずおずと告げた。

「だから今回も来ないと思うのか？ あんたこの島の門守なのだろう。ならば、そんな理屈の伴わない判断はやめろ。鬼に気紛れはないぞ」

「やはり、これは鬼の所業なのですな？」

その言葉を待ち望んでいたらしいひなたは、身を乗り出しかける。ナビトは一瞬「失言だった」とでもいうように口元を歪めたが、すぐにいつもどおりの無表情を作つた。そして「鬼は怪異の拠り所だと短く頷いた。」

「だから今回も大波はやつて来る。それは間違いない」

「けれど、前回大波は来なかつたのです。鬼に気紛れはないのですようつ？」

眉一つ動かさないナビトに対して、鼻息荒くなっていくひなたによくない空気を感じた鈴村は、手を伸ばして腰を浮かせるひなたを遮つた。一度場の空気を平らかにしなくてはならないと思つたのだ。狙い通りに、はつとして我に返つたひなたが座り直したのを確かめて、鈴村はナビトをまっすぐに見つめる。ナビトもまっすぐに鈴

村を見据えていた。光をまるで映さないナビトの暗い瞳を見ていると、鈴村は「晩年を迎えた老人であってもこんな目をする事はないだろう」と妙な気持ちになるのだった。きつと、瞳をきらきらと輝かせていた子どもの時分があっただろうに。

「ナビト、意地の悪いことはするな。こちらさんだって、生活がかかっているんだ」

「別に意地の悪いことなどしていない」

「それに、ここの門守は堅実な家系だったようだな、今までに島が唄った際の記録がしっかりと残されているんだ」

記録が、のところでぴくりと、ナビトの唇の端が引きつったような気がした。

「前回、島が大波を逃れたのは、島を訪れたある男がまじないを行ったことに由来しているのはその記録でもう分かっているんだ」

「……ならば、俺が知恵を貸す必要などないだろうに」

「けれど、まじないがどういったものだったのかは、記録には残されていなかったんです。その方がいったい何をしたのか」

ひなたはナビトの目を見ようと試みたようだったが、すぐに視線を逸らしてしまった。それを誤魔化すように、自分の子どもを見確かめる振りをして部屋の隅の方へ視線を逃がす。晩年の老人のような目をしているくせに、ナビトの目は無闇に強いのだ。

「ひなたの言う通り、まじないの記録は残されていなかったが、まじないをした男のことは書かれていたよ。その男は左頬に黒い痣があつて、『ナビト』と名乗ったことが書かれていた。まんま、『お前達』のことだろう?」

鈴村が指先を向けると、ナビトは目を細めた。暫くの沈黙が続く。鈴村はナビトの出方を伺いながら、ナビトが何故こつも間怠い態度を取るのかを考えていた。黒い痣、名をナビトとまでしてしまえば、それは間違いない鈴村達の眼前に座す青年と同じ者であるのに違いないだろうに。

帝家に次いで長い歴史を持つと言われるナビトという存在。その

名は、かつてこの国に九十九ある鬼門を祀る役目を負った者に与えられた名なのだという。古来よりの意味においての『門守』が生まれる遙かに昔の話だ。ナビトは鬼に関するあらゆる知識を持ち、そして、その知識を失わないために肌に刻まれたあの黒い痣と共に記憶をも受け継いでいくらしい。

それ故に「ナビトは死なぬ」とまで言う者も居た。

あらゆる鬼に関する知識と、膨大な記憶を有するナビトという者の名を受け継いだこの青年も、二百年前に杯島で起きた出来事について当然知っているはずなのだ。いや、ナビト以上に詳しい人間など、もうこの世に存在してはいない。

しかし、考えを巡らせてみたところでナビトではない鈴村にナビトの考えを理解することはできず、長い沈黙の後にナビトが発した「確かに」という言葉で鈴村の思考は途切れた。

「そのまじないをした旅の男はこのナビトに違いない」そうしてナビトは自分の胸に手を当てた。

「その際にまじないに関する一切の記録を禁じたのもナビト自身。あなたの先祖は約束を守ってくれていたようだな」

「それでは」

ひなたの声にあからさまな期待の熱がこもる。しかしナビトは顔色すら変えずに「けれども、だ」と重苦しく言葉を繋げた。もったいぶることはないじゃないかと鈴村は内心苛立っていたのだが、次にナビトが告げた言葉にその苛立ちは全て掻き消されてしまった。

「今回、俺が島を訪れたのは、この件に関して一切の助力をしないことを伝えるためだ。即ち、まじないを行う術はなく、杯島は大波に呑み込まれることになるだろう。死にたくなければ甘い期待などせず、一刻も早く家財をまとめ、ここを離れるようにと島民に伝えることだ」

鈴村は一瞬、頭の中が真っ白になり、「ナビト、何だつて？」と訊き返すまでに随分と時間がかかった。

「壮さん、俺を呼んだあなたの面目を潰すことになってしまつて申

し訳ないが、杯島の鬼に関して、俺は一切手助けできない」

鈴村は思わず立ち上がった。いた。

「どうして、何故そんなことを言う？」

「まじないをしないことが正しいと、俺が判断したからだ」

考える間も置かず、ナビトにはまるで迷いがなかった。そして静かに立ち上がり、着物に寄った皺を伸ばす。

「何をしているんだ？」

全く動けないでいるひなたに代わり、鈴村がナビトへ詰め寄った。「元々、長居するつもりはなかったんだ。記録が残されていないか、それだけが心配だったが、それも杞憂に終わった。伝えるべきことは島の門守に伝えたのだし、俺は日が暮れる前に島を離れさせてもらおう」

「お前！」

気が付けば、鈴村はナビトの胸倉を衝動に任せて掴んでいた。鈴村はナビトよりも拳一つ背が高い。体が浮き、爪先で立つ体勢になったナビトは、それでも顔色一つ変えてはくれない。

「離せ」

息を詰まらせながら左手で鈴村の手首を掴む。黒い肌から伝わる体温の低いこと。「この男には心というものが欠落しているのか」と怒りがふつふつと湧いてくる。

「波が来ると知りながら、何故助けてやろうとしない？ どう対処すべきかを知っているのはお前だけじゃないか」

「だから俺は島を出れば良いと言っている。大波はこの島にしか来ないのだから。それに、ここの人間のほとんどは漁師だ。生活の糧は失わない」

辺りには落胆、焦燥、はたまたは絶望といったようなじりじりとした暗い感情が渦巻いていた。

赤子というものはそういったものを、ある種獣のような敏感さで嗅ぎ付けるものだ。先程まで静かに寝かされていたひなたの子が堰を切ったかのように泣き出した。

鈴村の手首を掴んでいたナビトの指が子の鳴き声に反応してぴくりと動いた。そう鈴村が肌に感じた瞬間、視界が回転した。突然のことに鈴村は混乱したが、すぐにやって来た身体が床に打付けられた衝撃と鈍い痛み、それに影の掛かったナビトの顔を見上げて、「何のことはない、自分は投げ飛ばされたのだろう」と理解した。ただ、細身のナビトからどうやってそのような力技が出たのか理解できず、狐に摘ままれたような気持ちだった。

その騒動と我が子の泣き声で、それまで呆然としていたひなたはやつと自分を取り戻し、慌ててナビトの前へ飛び出して膝を折る。

「お願いします。どうか、まじないの方法を教えてください！」

ひなたは額を床に擦り付けて懇願したが、ナビトは「諦める」とただ一言返しただけで、乱れた着物を直している。

「お願いします！」

それでも食い下がろうと声を張り上げるひなたを歯牙にもかけず、ナビトは彼女の横を通り抜けた。すれ違い様に囁かれた「諦めるんだ」という声の淡々としてしていること。ひなたは弾かれたように顔を上げた。

「あなたそれでも人ですか！」

草履に足を通しかけたナビトは動きを止める。だらしなく手足を投げ出す恰好で寝転がっていた鈴村は、痛む腕を擦りながら体を慌てて起こした。

「残念ながら」

決して広くはない背中。覆う日に焼けた羽織が老人のような頑なさだけを物語る。

「お願いです」

「無駄だと言っている」

ひなたは我が子へ視線をやる。嵐のように泣き続ける子の声が部屋の中でがんと響いて痛い。

「ここには人の積み上げてきた『時間』があるんです。だから、それを失わせることなんて、私はみんなに選ばせられない！」

「だが、俺にだって選べないことはある」

何かを振り切るように、ナビトは黒い痣に覆われた左手で空を切った。

「それに、選べば後悔するのはきつとあんだだっただけだ」

ひなたは「え？」と声を詰まらせた。

「それはどういう意味……？」

その問いにナビトは答えを出さず、まるでその場から逃げ出すかのように戸へ手を掛けた。

「待って！」

ひなたの叫びと戸の開く乾いた音が重なる。潮の濃い香りが屋敷の内へ流れ込んだ。茜がかった日の光が差し込み、白い顔が照らされるとナビトは眼を細めた。眩しかったわけではない。

「どういうつもりだ？」

ひなたの屋敷の周りを島の男達がぐるりと囲んでいた。手には櫂やら鍬やらを握り締め、ぎらぎらとした目でナビトを睨み付けている。この世で最も穏やかさからかけ離れた光景だった。

「話は聞いた。あんたを帰すわけにはいかない」

ナビトの正面に立った男が低い声で言った。年齢は三十の中頃。

浅黒い肌広い肩幅は、海の男という像をそのまま形にしたようだ。確か島長の長男で、嘉一郎という名だと思いつたり、鈴村は眉を寄せた。

「何だ、揃いも揃って盗み聞きか？」

ナビトが指摘すると、嘉一郎はかあつと顔を赤くした。鈴村は裸足のまま飛び出して、「やめろ」とナビトの肩を掴む。掴んだ瞬間また投げ飛ばされるのではないかと体を強張らせたが、ナビトは掴まれた肩を無表情に見下ろしただけだった。鈴村はナビトと頭を寄せ合い、小声で「挑発するようなことは言つなよ」と忠告する。

周りの男達からはぴりぴりとした緊張が発せられていた。何かのはずみで手にした鈍器をナビトの頭へ振り下ろしかねないような雰囲気があつて恐ろしい。

「ともかく、あんたら手にした物を下ろしてくれ」

一応はなだめるつもりで鈴村は男達へ語りかけてみたのだが、予想していた通り「島の人間じゃないあんたには関係ないだろう」という言葉が方々から返ってきた。旅をして各地を巡って来た鈴村は、これに似た言葉をよく耳にしてきたが、一様に関係のある自分達は、何をしても許されるのだというような身勝手さが感じられて胸がむかむかとした。

これは恐らく意地になっただけなのだろうが、「壮さんは危ないから下がれ」とナビトに言われても「そうですね」などとは返せない気がした。

「確かに俺は島の人間じゃあないが、ナビトだってそうだ。こいつは俺の呼びかけに応じてやって来てくれたんだ。だから、こいつを無事に帰す責任が俺にはあるんだよ」

先程掴みかかって投げ飛ばされたばかりの自分を大いに棚上げしている自覚はあった。ナビトがまじないの方法を教えてくださいさえずれば丸く収まる、そんな考えは捨てることができない。だが、手に鈍器を持ち、一人を大勢で囲んだ上、力尽くでまじないの方法を聞き出そうとしている島民達を、鈴村は許すことはできなかった。

「さあ、物騒なことはやめてくれ」

鈴村が怯まず言い切ると、足取りを重そうにしながらも、ひなたが男達とナビトとの間へ割って入った。

「みんな、鈴村さんのおっしやる通りよ。手にした物を下ろして。島民どうのではなくて、これは人として間違っているわ」

さすがに、ひなたに呼びかけられ数人が手にした櫂や鍬を下ろしたが、嘉一郎は顔を赤くしたままにひなたへにじり寄って来た。

屈強な嘉一郎と比べ、ひなたの体は酷く小さくて、影がまるで覆い被さるようにひなたを包む。自分を守るようにしてひなたは胸の前で手を組んだが、それでも何とかまっすぐに嘉一郎の顔を見上げた。

「やめましよう、こんなこと……」

「こいつが大波を止める方法を知っていることは分かっているんだ。それなのに、何もしないで帰ると言っている。止めなければ俺達は波に吞まれちまうんだぞ?」

脅すような言い方に鈴村は思わず眉間に皺を寄せた。

「そもそも、あんたが役立たずだから、俺達がこんなことをしてるんだろう?」

さすがに「いい加減にしろ」と口に出しかけるが、「いい」と言葉が出てきたところでナビトに口を塞がれてしまった。

「壮さん、挑発するようなことは言つなよ」

「ナビト?」

ナビトは乱暴にひなたを自分の後ろへやり、嘉一郎の影の中へ入った。

「ナビトさん?」

ひなたも、まさかナビトが間に入ってくるとは思っていなかったように、目を丸くした。

しかし、ナビトが対峙したところで嘉一郎の屈強な体がしばむわけではない。同じ男である分、ナビトの方が心細く感じられたのはきつと鈴村の気の所為ではないだろう。それなのに、ナビトは「お前じゃ話にならない、どけ」などと、鈴村が『ぎよっ』とするような強気な態度を嘉一郎へ見せた。

おいおい、挑発するようなことは言つな、だろ。

「お前と話したところでことが進むとは思えない。島の長は来ているのか?」

男達は問いかけに黙り込んだが、しかし視線が泳いだのをナビトは見逃さなかった。

「ちゃんと来ているみたいじゃないか」

男達の輪の向こう側、痩せた老人が立っていた。ナビトはそちらへ体を向けたが、歩み出しはしなかった。島長の方から出向いてくるのを待ったのと、嘉一郎がその場を退くのを待ったのだろう。

堂々と振舞うのは結構だが、と鈴村は口の中で呟いた。嘉一郎の

頭にすっかり血が上っているのは、こめかみに浮んだ青筋を見なくとも明らかだった。怒りに歪んだ顔で睨まれてもナビトは怯む様子など微塵も見せず、もう一度「どけ」と言い放った。

「例えお前が俺を殴ったとしても、俺はお前達の望む物を差し出したりはしない。だからさっさと島長を出してくれないか、なあ？」

しん、と辺りが静まり返った。胃の辺りがひやりとしたのに、鈴村は肝が冷えるとはこのことかと思う。

やがて男達が顔を向けた先から老人がナビトの前へやって来た。

痩せて腰も曲がり始めているが、それでもナビトより背が高い。若い頃はさぞかし逞しかったことだろう。白髪が混じってはいたが、太い眉が嘉一郎とよく似ていた。

「あんたが島長か？」

「嘉平と申します」

嘉平は深々と頭を下げて見せた。

「聞いていたのなら、もう分かっただろう？ 唄は止められないし、大波は来る。島長なら、みなを一刻も早く島から離れるよう説得しろ」

「わしらだつてここで築いてきた暮らしがあるんですよ。そう簡単に大波に吞まれるわけにはいかない。ナビトさん、あんたにはどうしてもまじないの方法を教えてもらわにゃあなんのです」

ナビトは「そうだろうな」と腕を組んだ。

「ならどうする。俺を袋叩きにでもしてみるか？」

「できればそんなことはしたくない」

抑揚のない口調で物騒なことを話し合うナビトと嘉平をひなたは不安げに、嘉一郎は苛立たしげに眺めていた。

「ナビトさん、大人しく話してはくれませんか」

「話すつもりはないと言っているんだ」

「どうしても？」

「それが、正しい判断だと確信している」

嘉平が「では」と言ったのに、鈴村は思わず身構えた。「やって

「しまいなさい」とでも嘉平の口から発せられれば、ナビトは本当に袋叩きにされかねない。

「わしらにも考えがあります」

「何だ？」

「『ナビト』のことを少し調べさせてもらったんですよ。それくらいのことならわしらにもできます」

嘉平のその言葉に嘉一郎が「あれか」と呟き、目をぎらりと光らせたのを鈴村は見た。見たのと同時に「しまった」とも思う。

「そうだった。ナビト、あんたお上に追われてるんだってなあ」

嘉一郎の舌の滑らかなことに、鈴村は頭を抱えたいような気持ちだった。ナビトが人の中で生きる上での、唯一の弱点と言っても過言でないものがそれだったからだ。

ナビトはお上、つまり国に追われている。正しくは、鈴村を始めとした門守達へ鬼門の探査を命じている陰陽寮にだ。

そもそも、かつては鬼門を祀る立場の者であった門守達が何故鬼門の探査をするようになったのかと言えば、かつての門守達が長い年月をかけて鬼門を打ち捨て、人の里へ下ったことにある。そうして打ち捨てられた鬼門は人々の記憶から消え去っていったのだが、鬼は怪異の拠り所であり、鬼門は異界とこちら世とを繋ぐ場所、そういうった漠然とした言い伝えは残っていくものだ。

そうして数十年前、陰陽寮は鬼を全ての災厄の種とし、この国にある全ての鬼門を閉じようという計画を立てた。この計画は公にされてはいない。鈴村のような門守が各地に派遣され、実際に動き始めてはいるが、鬼門を閉じる方法すらまだ見付けられていないようなお粗末な状況が今だ。

しかし、そのような状態を解決する唯一の人物がこの国には存在している。この国にある鬼門全ての場所を知り、鬼等と語らうことのできる唯一の人物、そして陰陽寮が自身の威信を懸け血眼で捜している人物、それがナビトなのである。

元々、人が気安く鬼門へ触れることを嫌うナビトは鬼門を閉じよ

うという安易な国の考え方にも否定的であつた。陰陽寮へ手を差し伸べるはずもなく、かくして鬼門を閉じたい陰陽寮と、鬼門に触れてほしくはないナビトとの間には、追う者と追われる者という関係が作り上げられたのである。

「俺を脅すつもりか？」

「わしらはあんたを捕まえてお上へ突き出すこともできる、ということですよ」

老人とは言つても、晩年の老人のようなナビトの暗い目とは違つ、嘉平は挑戦的な目をしていた。

「俺は、陰陽寮に捕まるわけにいかないからな……」

「ならば、まじないの方法を教えてください」

ナビトは肩をすくめた後、ため息を吐き出した。無表情の中で行われるその動作に、鈴村は妙な芝居っぽさを感じて首を傾げる。

「かと言つてタダで教えてやる義理もない」

「金ですか？」

「いや、そんな俗っぽいものじゃない。まじないに欠かせないものだ」

「まじないに欠かせないものですか……」

「そうだなあ」

ナビトは考え込むように顎に手を添え、ついとひなたへ視線を向けた。

嫌な予感がした。

「赤子を一人、俺に寄越せ。それが条件だ」

え、といういくつものため息の後に何度目かの沈黙が降りた。誰もが表情を歪ませ、ひなたは顔を青ざめさせた。けれどナビトは変わらぬ無表情を貫いている。

島の男達は互いに目配せし合う。嘉一郎さえも他の顔を伺つていた。誰も彼も周囲の出方を伺つて、誰かが口を開くのを待っているようだった。どのように応じるのか、正解を求めているのだ。

ナビトと嘉平だけは微動だにせず、暗い目でお互いを見据えてい

た。けれど、暫くして嘉平の方が瞼を閉じた。深い皺が眉間に刻まれる。

眠りを誘うような、穏やかで美しい島の唄が聞こえる。

そして嘉平は言った。

「分かりました。赤子を一人用意しましょう」

杯島の鬼【二】

綺麗に半分になった月が暗い空を照らしている。小さな窓から差し込む光は酷く儂くて、鈴村とナビトはお互いの輪郭しか確認することができなかった。

そこは嘉平の所有する蔵だった。大きくはないが壁が厚く、天井も高い。随分と頑丈そうで見派なものを持っているなど鈴村は場違いな感心をした。

この蔵からの脱出は難しそうだ。

夜になっても変わらず島は唄い続けている。島の中で起こった騒動など忘れさせてくれるような、眠りを誘う穏やかな唄。今更にこの唄は母が子に歌う子守唄に似ているなど思った。この唄が大波を呼んでいるなど、鈴村は今になっても信じられない。

頬がじんじんと痺れるように痛んでいた。口を開けようとするとだけで鋭く痛み、熱を持っているのが感じられることから、したたか腫れているようだ。

顎を恐々動かして具合を確かめっていると、「痛むかい、壮さん？」とナビトが訊ねてきた。

蔵に放り込まれてから随分と時間が経っている。今の今まで全く口を開こうとしなかったナビトからの問いかけに、鈴村は内心ほっとしたのだが、「まあ、当然痛むだろうよ」とわざと嫌味を吐いてみる。

実際、蔵に閉じ込められているのも、頬が腫れているのも、原因はナビトにあるのだから、それくらいのことを言う権利はあるだろうと思った。

思ったのだが、「壮さんには申し訳ないことをした」などと意外にあっさりとなびトが謝罪したものだから、鈴村はすっかり毒気が抜かれてしまった。

「壮さんまでここへ放り込むとは、乱暴な奴らだ」

いつも通りに抑揚のないナビトの声。だが、かあんという閉じられた場所特有の響きがあつて、いつもと雰囲気違って聞こえる。

「お前こそ大丈夫か？ あの嫌味な島長の息子、ここぞとばかりに殴りかかつてきたんじゃないか？」

「あいつから拳は頂戴していない」

畳み掛けるようなナビトの言い方に、「おや、嘘だ」と鈴村は口元を緩めたが、腫れた頬が痛んで、すぐに戻した。

「しかし、ひなたに殴られたのはさすがに驚いた」

「確かに」

「丸きり背後は油断していたんだ」

人間が押し合い圧し合い、怒鳴り声やらうめき声やらの喧騒の中で、人の体と体の隙間から鈴村がナビトを見た時、ナビトは背にしていたひなたに後頭部を力一杯殴られていた。あれは殴った本人も拳を痛めたのではないだろうかと思うような無茶な殴り方だったが、『丸きり油断していた』ナビトの膝を折るのには充分な衝撃があつたのだろう。

「だがなあ、あの騒動はお前が悪いだろうよ」

今から数刻前に起こつた出来事は、鈴村にとってかなり衝撃的なものだった。何に關しても無感情で、無表情。口は出すが手は出さない、といった態度のナビトが突然老人の胸倉に掴みかかったのである。

「愚か者め！」

そして一喝。

まさかナビトの怒鳴り声を聞く日が来ようとは夢にも思っていない。瞬間、鈴村は啞然として固まってしまったが、嘉一郎を始めとした島民達はそうではなかった。

ナビトの声がかきつけかくなつて乱闘のような騒ぎが起こり、無茶苦茶な状態となった。結果、ナビトはひなたに殴られ、状況がよく分からぬうちに鈴村も捕らえられ、現在仲良くこの蔵に閉じ込められている、というわけだ。

「あれは確かに軽率だったと反省している。結果的には壮さんを巻き込んでしまった」

「島にお前を呼んだのは俺なんだから、そのことは、まあいいさ」
ため息のような「そうか」という呟きがナビトから漏れた。今、ナビトがどのような表情をしているのか鈴村は想像してみる。想像してみるのだが、いつもの無表情しか浮んでこないのがもどかしい。後ろに縛り上げられた手の楽な位置を探してもぞもぞと体を動かしながら、鈴村は「なあ、ナビトよ」と呼びかける。

「何だ、壮さん？」

「あれは、冗談だったのか？」

「……何が？」

せめて、もう少しだけ明るければ良かったのに。

「赤子を寄越せ、だ」

ナビトが息を呑んだのが肩の動きで分かった。その輪郭は壁に背中を押し付け、ずるずると頭の位置を下げていく。そして埃っぽい床に構うことなく体を横にすると、鈴村へ背中を向けた。何か失敗をして親に怒られた時、そうしていた幼い頃の自分を鈴村は思い出す。背中を丸めるその姿はまるで子どもの不貞寝のようだった。

「誰か、外には居ないだろうか？」体を横たえたまま、ナビトはそうつと訊ねた。

「うん？」

「見張りに誰か立って居ないだろうか？」

「ああ、そういうことか。この蔵、戸が二重になっていて、なかなか頑丈そうだったし、俺達は腕だけじゃなく、足だって丁寧に縛り上げられている。見張りは居ないだろうさ。今頃、お前にどうやってまじないの方法を聞き出すか、みなで算段でもしているところじゃないか？」

「それは恐ろしいな。俺は拷問でもされるのだろうか？」

「その可能性は、あるな」

想像すると殴られてはいないはずの腹の辺りがキリキリと痛むよ

うな気がした。ナビトの口が堅ければ、それくらいのことではしでかしそうな、ある種狂気じみた雰囲気が島民達にはあった。

合わせてこの島という閉鎖的な空間は、人間らしい判断を鈍らせるような気もする。暮らしが懸かっているという切羽詰った状況はみな同じで、助かりたいという気持ちもみな同じだ。

そして、その鍵を握っているのは間違いなくナビトなのである。

「話を戻すけどな、壮さん」

「何だ？」

「壮さん、俺は冗談といった類のものが苦手なんだよ」

だろうな、などと茶化してしまえる余裕があつたらどんなに良かったかと鈴村は思う。

「この島には鬼門があるな」

「ああ」

「そこに棲む鬼、そいつらは^{おし}扨尾と^{なみ}肴見と言う。二体で一对を成す鬼だ。彼らは時間という形のないものを喰らってこちら世で生きているんだ」

ナビトの語りに、鈴村はひなたの言葉を思い出した。ここには人の積み上げてきた時間がある、というあの言葉だ。そんな曖昧なものを生きる糧とする者が居るのと思つたものの、鬼等を人の常識に当てはめる方が非常識であつたことを思い出す。まったく、自分は門守失格じゃないか。

「唄っているのは扨尾、それに呼ばれて大波を起こすのが肴見だ。

肴見が島を呑み込むことによつて、時間を喰らっていると。つまり、大波が起きるのは彼らの生命活動だ」

ならば人間の力で止められるはずもないだろう、というナビトの言葉が鈴村には遠くに聞こえた。頬にひやりとした汗が伝う。

「しかし、前回島が唄つた際にここを訪れたナビトは、扨尾に大波を起こすのをやめてはくれなしかと願いに行った。二百年に一度の食事だ。無理だということは元より分かつていたさ。当然一度は断られる」

「けれど、そのナビトは大波を止めてみせたのだろうか？」

「……諦めようとしたナビトへ厩尾はこう続けたんだ。何か代わりになるものは、と」

鈴村は頭の奥の奥の方で、何かが合わさったような、カチリという音を聞いた気がした。

「鬼等が喰らう時間の代わりにナビトは赤子を差し出したのか？」

自然と早口になっていた鈴村とは対象的に、ナビトは深い呼吸を数度繰り返した後に、「そうだ」と首肯した。

鈴村は瞼を閉じる。ナビトの輪郭が消え、まるで闇の中に呑み込まれたかのような不安が襲ってきて、結局はすぐに瞼を持ち上げてしまう。沈黙が恐ろしく、「それで大波が止められるのか？」と続けてナビトへ問いかけるが、実を言えば話の続きなどもう聞きたくはなかった。

「どのような人間だって始まりは母の腹の中から産まれてきた赤子だ。赤子はその小さな体躯にこれからの時間を抱き込んでいる。大人よりも遥かに多く。だから、厩尾は赤子を喰わせてくれれば、とりあえずそれで勘弁してやると言ったのだろうか」

それは、つまり生贄ではないか。喉元まで出てきた言葉を鈴村は音にすることができなかった。代わりに出てきたのは「ああ」という上擦った情けない声だけ。

「俺達ナビトは先代から記憶を受け継ぐ。先代も、その先代から記憶を受け継いできた。ずっとずっと、ナビトはナビトの記憶を受け継いできた。それ故に俺達のことを死なない人間だなどと言う輩も居る」

ナビトはいつになく饒舌だった。語らないではおれぬのか、それとも昼間の騒動の所為で些か興奮しているのか、ともかく自分のことをこんなにも語るナビトを見るのは初めてだった。それを友人として嬉しく思う反面、鈴村はナビトを杯島へ呼んだことを後悔し始めてもいた。

島が唄ったからといって、ナビトが杯島へ足を運ぶ必要などなか

った。二百年に一度のこととはいえ、大波が来ることを島民達は充分に予想できていた。降りかかる火の子を払うのは、火の下に居る者の役目だ。冷たい言い方かもしれない。けれど、これはナビトが負うべき役目ではなかった。

自惚れかもしれないが、ナビトは鈴村が呼ばなければ杯島には来なかったのではないだろうか。それが酷く申し訳なかった。

「記憶を受け継ぐと言ってもな、俺達は元々別の人間なんだ。全く同じであるはずがない。その証に俺の先代はよく笑う人だったよ」

「皮肉が過ぎるんじゃないか？」

「壮さん、前回厄尾が唄った頃にこの島を訪れたナビトはな、俺以上に無感情な男だった。だから、厄尾から聞いたまじないの方法を門守に教えたのだろう。そんな男でも、赤子を厄尾へ差し出した時は恐怖で足が震えた。あの光景……俺は、あの男でさえ恐怖した所業を犯す勇氣など持ち合わせてはいないんだ」

「ナビト……」

記憶を受け継ぐということは、自分の眼で見ていないものをさも自分の眼で見たもののように受け継ぐということだ。この記憶だけは、と言って自分の欲しくない記憶を捨てていくことなどできないし、忘れられはしない。

鈴村は想像してみるが、途方もなさすぎて、まるで想像が追いつかなかった。それでも、はっきりしているのは、それが決して幸福なことではないということ、寧ろ悲劇だということだった。

縛られた手、肌が縄目で擦れて痛む。罪悪感が押し掛かってきて、潰れてしまいそうだった。

「俺が恐ろしいならば、他の誰かがやってくれればいい、そんなことじゃない。人の生活というものを、赤子の命で贖うことなど間違っているだろう？」

ナビトは絞り出すように言い切った。これは、懺悔だったのかも
しれない。

これは、人殺しの告白だ。

石でも呑み込んだような気持ちだった。まじないなど、簡単なものだと思い込んでいた。だからナビトがまじないを教えることを拒んだのには本当に腹が立ったし、実際冷血漢と罵りたい気持ちでもあった。けれどこのナビトの告白を聞いて、鈴村は改めて自分の愚かさを恥じた。

鈴村も、人の命と人の生活を秤にかけるのならば、人の命を選びたい。生きてさえいれば、困難を乗り越えられる可能性は残されているのではないか、そんな甘い考えを信じたいのだ。

「どうして、俺にそれを教えてくれたんだ」

やるせない気持ちでぼつりと訊ねると、体を横たえたナビトの輪郭が「さあ」と首を傾げ、こう続けた。

「誰か、共犯者が欲しかったのではないかな？」

「そうか……」

辺りを再び沈黙が包もうとした時、横になっていたナビトが突然体を起こした。何の前触れもなく、また性急な動きであったことに鈴村は目を丸くする。

「ナビト？」

「しっ、静かに壮さん」

ナビトは声を落として言った。その声から緊張を感じ取った鈴村は、顎を引いて唇を結んだ。

「ひなたか？」

ナビトは壁の向こう側へ探るように、けれどはつきりとした調子で声をかけた。

ひなただつて？

鈴村は腰を浮かせる。

「ひなた、お前、まさか聞いたのか？」

本当にひなたが壁の向こうに居るのだろうか。意味もなく目を細めて壁を睨み付けるが、鈴村が疑問の答えを見付けるよりもナビトの行動は速かった。背を壁に押し付け立ち上がると、縛られた足で跳ねて戸へ移動する。そしてその場で両膝をついた。

「壮さん、少し蔵の隅の方へ下がっていてくれないか？」

「おいナビト、本当にひなたが外に居たのか？」

心臓が早鳴り、耳元で血がドクドクと流れる音が聞こえる。額にじっとりとした汗が浮かんで気持ちが悪い。

「恐らく」

「恐らくだつて？」

「いいから壮さん下がってくれ。これから無茶をする」

無茶をする、とはその無茶をする本人が言うべき言葉ではない気がしたが、それでもナビトの切羽詰った様子に気圧され、鈴村は周りにあつた壺やらは木箱やらを押しつけ、隅の方へ移動した。

「何をするつもりなんだ？」

そんな鈴村の問いかけには答えず、ナビトは「誰にも言ってくれなよ、壮さん」とだけ呟いた。まさに、共犯を持ちかけるような科白だと思つた。

小窓から差し込んでいた光が消え去り、辺りが完全なる闇に包まれる。月が雲で隠れたのだろうか。鈴村は意味もなく首を伸ばして辺りを伺つてみる。どちらが天でどちらが地なのか忘れてしまいつくなる暗闇の中、背中を壁にぴたりと押し付けながら、ナビトが動くのを待った。

静かに、けれど大きくナビトが息を吸う気配があつた。

「顕れたまえ」

唐突に暗闇の中にナビトの姿が現れた。鈴村はぎよつとして、脛を近くにあつた何かの箱にぶつけた。びりびりと痛みが走つたが、そんなことに構つてはいられない。信じられない。ナビトの全身が白く光り、闇の中にぽっかりと浮んでいた。柳の下に現れる幽霊とはこのような姿ではないだろうか。

「何だ、これは？」誰に答えを求めなくてもなく声に出す。

ナビトの体は徐々に光の強さを増していった。やがて蔵の中全体をはっきりと照らし出す。昼間のような明るさだったが、日の光とは違う色のないその光にはまるで温度が感じられず、寧ろその気味

悪さに鈴村は寒気を覚えた。

ナビトの体は頭のとっぺんから爪先まで光に包まれている。それなのに、あの禍々しい黒い痣だけは相変わらず光を呑み込んでいて暗い。それがまた不気味であった。

しかもこの光、目を細めてしまうほどに眩しく辺りを照らしているというのに、影を全く作り出していない。鈴村はそつと背後を振り返ったが、そこにあつて然るべき自分の影が見当たらない。あるのは光によって白く染まり、のっぺりとした蔵の壁だけだ。

鈴村は一度だけこれに似た光景を見たことがあった。

鈴村が始めてナビトと出会った場所　鬼門だ。

そこに考え至った瞬間、全身が粟立った。恐怖で体の内が凍りついて動かなくなる。冷や汗が背中をつうつと伝って落ちていくのが気持ち悪い。

「壮さん」

ナビトの声は殊更穏やかだった。

「よく見る、ここは鬼門の内じゃない。ただの蔵の中だ」

「ただの蔵の中だが……」

情けなくも上擦る自分の声が別の人間もののように思えた。目の前の現実味のない光景が以前に味わった恐怖と重なり、呼吸の邪魔をする。無闇にはっ、はっ、と息を吐き出してばかりいると頭がくららした。それでも「壮さん、息を深く吸い込んで」というナビトの声に励まされ、息を吸い込む。

「そこで止める」

そして口を閉じる。

「大丈夫だ、すぐに終わる」

ナビトは顎を引き、自分の額を戸に押し付けた。眉間に皺を寄せ、苦悶の表情を浮かべ、さらに玉の汗をかいている。

自分の知るナビトにとつての現実味のない様子を目の当たりにして、鈴村は自分が冷静さを取り戻していくのを感じた。男がこれくらいのこと、と妙な見栄を張っている気持ちもないとは言えない。

ナビトがナビトとして、どれほどの長い間記憶を受け継いできたかは鈴村の想像を超える。けれど、鈴村が友人と呼ぶ彼の人の前ではせて年長の者として取り乱した所など見せたくはなかった。

やはりただの見栄ではないかと鈴村は引きつった笑みを浮かべた。「すぐに終わらせるから」

ナビトは呻くように言った。その手首をきつく縛り上げていたはずの縄はいつの間にか消え去っていて、自由になった手の、あの黒い痣で覆われた左手でナビトは戸に触れる。するとその左手を置いた場所から墨を溢したように黒い染みがすつつと広がった。

その黒い染みが戸全体を覆うと、今度は『ずずず』、という気味の悪い音が辺りに響き出した。

ずず、ずずず、と。

得体の知れない、何か巨大なものが這っているような音だ。鈴村は大蛇の姿を思い浮かべるが、いくら蔵の中を見回してもそんなものはどこにも存在していない。けれども、鈴村の背後から、時には鈴村の頭上から、その這うような音は聞こえた。蔵の壁中を這い回っている。

ずず、ずずず。

ずず、ずずず。

ずず、ずずず。

ずず、ずずず。

ずず、ずずず。

恐ろしくない、などということとはなかった。けれど、もうこれ以上情けない所をナビトへ晒すわけにもいかず、「すぐに終わる」というナビトの言葉を信じ、何かを通り過ぎるのを、息を止めて待った。

そうしている内に、何かの存在が動きを緩めるように、その不気味な音は徐々にゆっくりとなり、小さくなり、やがて消え去った。

行灯の火を吹き消したように辺りを包んでいた白く温度のない光はふっと消え、暗闇が降りてきた。雲に隠れていた月が顔を出した

ようで、ナビトの姿を四角く照らし出した。

そう、先程までそこにあっただはずの戸が忽然と消えていた。

戸に手をついていたナビトは支えを失い、そのまま前に倒れた。

「ナビト！」

鈴村は水中から顔を出したように呼吸を再会させた。そして、先程ナビトがしたように背中を壁へ押し付けて立ち上がり、拘束された足で跳ねながらナビトの元へ駆け寄った。

月に照らし出されたナビトの顔からは苦悶の表情は消えていて、いつもの無表情に戻っていたが、流れるほどに汗をかき、肩で息をしている姿はいつも通りとは言えなかった。

「大丈夫か、ナビト？」

体を起こしてやりたいが、後ろ手に縛られたままの鈴村にはどうすることもできない。

「無茶をした」荒い息遣いの中からナビトはそう呟いた。

何をやったのか、とは訊かない。つまり、あれがナビトのナビトたる所以。ナビトが負わなければならないものなのだろう。

やがて、両の手を地面について重そうに体を起こしたナビトは、「壮さん、ほら」と震える手の人差し指を伸ばした。その先を視線で追うと、そこにあったのは盆に乗せられた二つの湯呑と、まだうつすらと温かい茶の入った急須であった。

確かに蔵の外には人が居たのだ。

「最悪の失態だな」

淡々とした口調で自分を叱責しながら、額の汗を拭ったナビトは、鈴村の手の縄を解いた。そうして、「壮さんには迷惑をかけた」などと改まって頭を下げる。

「迷惑ついだが、後は自分で何とかしてほしい」

「何とかしてほしいって……」

「勘違いしないでくれ。何とかしてほしいというのは、一人で島を離れてくれということだ。もう、こんな島は出た方が良い」

「お前はどうするんだ？」

「俺は、厩尾の元へ行こうかと思う。戸を消すのに時間がかかってしまったから、ひなたは島の人間に大波を止める方法を伝えてしまっているかもしれない。島民を説得しなくては。それに、彼らと対するのは、厩尾の元の方が俺にとって都合がいい」

「そんな、一人でなんて危険だろう?」

「大丈夫だ」

ナビトはひなただろう人物が持つて来た急須から湯呑へ茶を注ぎ、一気に飲み干した。さらにもう一杯注ぐ。

「俺は死なぬために生きていような人間だ。止めようとは思っているが、身に危険が及ぶのならば、さつさと諦めさせてもらう」

注いだ二杯目をナビトはあおるように飲んだ。そして、よろめきながら立ち上がる。「無茶をした」と言った通り、先程の業はナビトの体にかなり大きな負担を強いることは明らかだった。鈴村は慌てて足の縄を解き、立ち上がってナビトの体を支えてやる。

「一緒に行こう」

「いや、いい」

間髪入れずのナビトの返答に、鈴村はがくりと肩を落とす。

「少しは考える振りくらいしてくれよ、お前」

「そういったことは得意じゃないし、壮さんにこれ以上は迷惑をかけられない」

「さつき迷惑ついでと言っただろう?」

「危険だから、結構だと言っているんだ」

意外にこいつは頑固者なのだろうな、と鈴村は内心舌を巻いた。

それでも、鈴村とて素直な人間ではない。はいそうですか、と見送ることなのできないのだ。

鈴村は両手を伸ばし、ナビトの肩を軽く押した。すると、ナビトは呆気ないほど簡単に後ろへ倒れ、尻餅をついた。「何をするんだ」という当然の非難の声を上げるナビトを、鈴村は仁王立ちの恰好で見下ろす。

「危険なのはお前だろう? こーんなふらふらのくせに偉そうなこ

とを言うもんじゃない」

「壮さんの恰好の方が偉そうだが」

「確かに」

風が吹いて、潮の香りを感じた。その香りに混じって島の唄が聞こえる。こんなにも穏やかな唄なのに、この穏やかな唄に惹きつけられ、鬼門を探して島を訪れた時は不安などなかったのに、今は不安で一杯だ。

「ナビト、お前をこの島へ呼んだのはこの俺だ。だから、最後まで責任持つてこの件に関わるぞ。でないと後味悪そうだ」

この不安の原因は、鬼にあるのではなく、人間の行動にあるのだなと思うと、出会ったばかりの頃にナビトが言った「災厄を連れてくるのはほとんどが人間だ」という言葉を思い出した。あの時のナビトは、もしかしたら鈴村を揶揄していたのかもしれない。

「だが、お前が諦めた時には一緒に逃げさせてくれ」

自分でも随分と恰好の悪いことを言ったのは分かっていた。ナビトはわずかに首を傾げ、頭をかく。そして立ち上がり、着物の尻に付いた土埃をはたはたと払った。

「いや、いい」

「やっぱりな」

そう言うと思った。

子ども染みだした草だとは思っていたが、鈴村は恥ずかしげもなく舌を出した。

杯島の鬼【三】

島にある鬼門、そこが厩尾に棲み処だった。

鬼門へ向かう道中、鈴村は背にナビトを負った。大人を背負う、という行為は『重い』と感じるよりもまず何やらむず痒いものを感じるから不思議だ、などと妙な感慨を抱きながら、鈴村は歩みを進めていく。

何故このような間抜けな恰好になったかと言えば、鈴村が無理やりナビトを背負ったからに他ならなかった。「一緒に行く」「来なくて結構だ」の押し問答の末、「こんなことをやっている場合じゃない」と勝手に歩き出し、一人で鬼門へ向かおうとしたナビトを、鈴村は力尽くで抱え上げた。ふらふらと足下の覚束ないナビトを抱え上げるのは、鈴村が思っていた以上に容易く、ナビトの疲弊を思うと鈴村は不安が募るばかりだった。さすがにナビトもそこまでされて諦めたのか、または呆れてしまったのか、それ以上は何も言わず、抵抗もしなかった。

島に滞在していた間、何度か調査のために鬼門の近くまで足を運んだことはあったのだが、いつも日の出ている間であったため、どうにも暗がりの道は不安があった。しかし、鈴村が「こつちでいいか？」と訊ねると、ナビトは今日島を訪れたばかりなのに「こちらで間違いない」と明かりもない中、道筋をしつかりと示してくれた。「どうにも、恰好がつかないな」

そんな風に呟く鈴村を尻目に、「その分かれ道を右へ」などとナビトの言葉には迷いも澱みもない。やはり以前のナビトの記憶があるからなのか、と鈴村は遣り切れないような気持ちになる。

林の中をナビトの案内で進んで行くと、唐突に開けた場所へ出た。灰色に澱んだ小さな沼、その向こうに人一人がやっとなって行けそうなくらいの小さな洞窟があった。その洞窟を奥へ進むと、鬼門があるらしいのだが。

眠りを誘うような歌声は、確かにあの洞窟の奥から響いていた。「壮さんは外で待っていてくれ。いや、帰ってくれても構わない」そう言つてナビトは鈴村の背中から降りた。地に足が付くと、ナビトの体は大きくぐらついた。鈴村が伸ばした手は丁寧に断られ、ナビトは着物の裾も捲くらずに沼へ入つて行く。慌てて追いかけてうしたが、そんな鈴村をナビトは振り返り、目で制止させた。

「そんな、俺はお前をここへ連れて来ただけか？」

絶望的な気持ちで訴える鈴村に、ナビトは「形式はそうなるが、それだけで十分に俺は助かつたんだ」答えた。

「いやいや、外で待っているだけなんて、何もしないのと同じだろう？」

「だが」

ナビトは鈴村へ左の手の平を見せた。静止させる意外ナビトに他意はなかつただろうが、鈴村はその黒い手の平に海と山ほどの隔たりを感じた。人と鬼ほどと言ひ換えることもできる。

「だが壮さん、この先には鬼門がある。まさか今日まで洞窟の中へ入つてはいないだろう？ 壮さんは鬼門に干渉されやすい。これ以上近付くのは危険だし、何かあつても以前のように俺が助けてやれるとは限らない」

ナビトが茫洋とした口調で語つたのに鈴村はぶるりと肩を震わせた。それと同時に何か反論をと口を開きかけるが、口の中がからからに乾いていて、上手く動かせない。

自身の特異な体質となつたことは鈴村が一番よく分かつていた。

異界とこちら世との境、異界とこちら世を繋ぐ場所 鬼門。門と言つても、文字通りの門構えがあるわけでは当然ない。形の定まらない、実に不安定な領域であり、本来ならば人が容易く触れて良い場所ではない。

それを口が酸っぱくなるほど教え込まれていたのにも関わらず、根底を理解していなかつたまだ門守になりたての頃、鈴村は不用意に鬼門へ近付いたために鬼門に吞まれたことがあつた。

地に足が付かない、何にも手が触れない、どこまでも続く色のない世界に突如として放り込まれた。叫んでも自分の声すら耳に届かない、全く何も無い空間を鈴村は長い時間漂った。いや、鈴村がそう感じていただけで、もしかしたら瞬きほどの時間も過ぎてはいなかったかもしれない。ただ、じわじわと己という存在が異界に溶けていく感覚、あの時の恐怖は今でもしっかりと体に染み付いている。ナビトに引き上げてもらわなければ、確実に鈴村は異界の中に消えていただろう。実際に鈴村が門守になってからの数年で鬼門に呑まれた同僚は一人、二人ではない。鈴村は単に運が良かったのだ。

そうして異界からこちら世へ戻って来たからなのか、鬼門は鈴村に干渉するようになった。異界へ戻って来いと鈴村の体を呼ぶのだ。自分が鬼門の傍らに立つことによって、どのような事態が起こるか全く予想がつかない。鬼門も鬼と同じだ。今回だけは見逃してやるなどという気紛れはない。

そう理解してはいても、鈴村は自分の体質を都合良く言い訳にして、一人安全な場所へ逃げるように悔しかった。

「ここで待っている……。外に居るから、何かあったらちゃんと大声で知らせるんだぞ」

「そう言ってもらえるだけで俺は心強いよ。ありがとう、壮さん」
沼をまっすぐに進み、洞窟の奥へ姿を消すナビトの背中を見つめながら鈴村は拳を握った。

「つまり、お前は何かあっても俺に知らせてはくれないつもりなんだな」

岩肌に触れると、ぬるりとした感触があった。灰色をした沼と同じで、洞窟の中の空気は澱んでいて、何やら生温い。居心地の良い場所ではないが、文句を言っではいられなかった。ナビトは一刻も早く扨尾と語る必要があった。自身の記憶の中にある『あの光景』を回避するためだ。

暗闇で何も見えない中を手探りで進んでいく。道が分かれることはなく、ただ奥へひたすら進んで行けば鬼門までたどり着けることは分かっていた。分かっていたが、まるで巨大な生物の腹の中へ潜り込んでいるような、ナビトである自分でも表す言葉が見付けられないような奇妙な気持ちになるのだった。

怖いのか、不安なのか。

そんな単純なことさえ分らない。なかなか感情を出せなくなっってしまったのはいつの頃だったか。幼い時分は快活とまでは言えなくとも人並みに笑い、人並みに怒り、母の死には涙したごく普通の子どもであった。

紆余曲折を経て、このナビトという名を受け継いでから、冬を七度は越している。その間は人とはほとんど語らず、鬼とばかり語る日々だった。

そのため、自分が全く笑わない者になっていることに気付いたのはそう、鈴村壮介に出会ってからだ。

鈴村はナビトを恐れなかった。今までにナビトが出会ってきた現在の『門守』と呼ばれる者達は、鬼門という領域の恐ろしさをよく知っているが故に、一様にナビトを恐れた。異界へ足を踏み入れ、鬼等と語り合うことのできるナビトをもう人とは思えないのだろう。けれど鈴村は違った。鈴村は良い意味で警戒心のない男であった。よく喋り、大声で笑い、時には唾を飛ばして怒る。厳格さと尊大さを勘違いしている嫌いのある現在の門守達の中にあつて、その明朗闊達な人柄は随分異質だったのではないだろうか。

それはナビトの前でも変わることはなかった。ナビトを人として見る、鈴村のそのような態度は、ナビトが命の恩人であるからなのかと思つたこともあつたが、鈴村は決してナビトに卑屈な態度を見せることはなかった。

そんな男と何度か顔を突き合わせているうちに、自分が笑わない者になつていることに気付かされたのだ。確かに、ナビトとしての“役目”を果たす日々は淡々としていて、笑う必要などは勿論、何

かに怒る必要もなかった。けれど、全てのナビトが自分と同じようになるかと言えばそうではなく、こうなってしまった原因を考えてみて、自分の記憶の中にしかないあの事件ではないかと思いついた瞬間、ナビトは寒々しいものを感じた。

考えを消し去るように頭を二、三度振る。それだけで地面が共に揺れたように足元がふらついた。

蔵から出る方法がなかったとは言え、やはり“常闇”を使ったのはまずかったかもしれない。もともと、アレは人の思い通りにできるものでも、して良いものでもない。体と魂とを繋ぐ糸が何本もねじ切られたようで、心臓の辺りがギシギシと不安定に痛んだ。

ナビトは着物の胸元を掴み、大きく息を吐き出す。

『何をこの島のために必死になっっているのだ』

誰かが耳元で囁いた気配があった。

自分の記憶の中に住むナビト達が嘲笑をしていると感じる。

目を閉じれば、何十人もナビト達が自分を囲んでいる光景が瞼の裏に広がった。そして次々とナビトに言葉を投げかける。みな一様に諭すような口調だ。

一人が『鬼に害はないだろう』と言うと、その両隣が頷き、また一人が『人の勝手にさせておけば良いではないか』と言う。

「勝手にさせれば、きつと子どもが尻尾に差し出される」

ナビトが言うと、すぐさま後ろの方から『それがどうしたと言うのだ？』と返ってきた。『彼らは後悔も反省もしない。後悔も反省もできないのだ』と別の一人が続けると、『それは私がよく知っている』と目の前のナビトがぼつりと呟いた。感情のない目をした男だった。

あんたの所為じゃないかと言ってやりたかった。

『その機会が与えられたとしても、彼らはただ、仕方なかったと口にするばかりだろう』

円の中心から外れた奥の方から声が上がれば、みなが頷いて見せた。ナビトは冷めた目でぐるりと辺りを見回し、そして一言「仕方

ないじゃないか」と呟くのだ。

それに、俺は島のために今必死になっているわけじゃない。

震える膝を擦り、ナビトは歩みを進めた。

どれくらい奥へ入っただろうか。視界にうつすらと白い光が見えたのに、ナビトは安堵の息を漏らした。そこがナビトにとって最も親しみのある場所、鬼門だった。鬼と語らうために一つ所に留まることを忘れたナビトにとって、郷愁を感じる地があるとするならば、まさにそこかもしれない。

とにかく今は扨尾と話がしたかった。

逸る気持ちとは反対にもたもたと足を動かし、鬼門へ近付いていく。しかし、鬼門の姿を確認できる位置まで来てナビトは足の動きを止めてしまった。砂利を踏んだ音に肩を震わせた影が洞窟の中にはあった。

異界の色のない光の中に影が生まれることはない。

「ひなた……」

ナビトは名を呼ぶ。そこに立っていたのは赤子を背に負ったひなたであった。負われた赤子は扨尾の唄に誘われるように静かに寝息を立てている。

ナビトはひなたの向こう、鬼門を背にして母のような柔らかな声で唄い続けている扨尾へ視線を向けた。

扨尾は異界の光に薄く照らされた灰色の岩の上に腰を下ろしていた。その輪郭は四、五歳ほどの子どものように見える。人と同じように手足があり、どの先にも五本の指があり、その指先には丸い爪が付いていた。

ナビトはそろそろと視線を持上げた。扨尾は口を仕切りに動かし、唄い続けている。白い肌の上にあるその口の中はぞくりとするほどに赤く、隙間を空けて小さな歯が並んでいた。人でいうところの顔と呼べる場所にそれ以外のものは何もない。目も、鼻も、眉すらもなかった。つるりとした白玉のような肌の上で、赤い口だけが蠢きながら唄を奏でている。

ああ、厩尾だなあ。初めてこの眼で見る者に対して湧き上がる懐かしいという感覚に、ナビトはもう戸惑うことはない。名と痣を受け継いだ時、一緒に肌へ染み込んだ感覚だ。

ナビトは頷き、そしてひなたへ視線を戻した。

ひなたが持つて来たのだろう、提灯の淡い黄色の光が辺りに色を生み出している。照らし出されたひなたの顔には血の気がなく、ナビトの姿を見付けて青くなった。

「どうやって蔵から……」

ナビトはひなたから視線を外さず、辺りを探る。厩尾とナビトと、ひなたとひなたの負った赤子以外にその場に誰か居る気配はなかった。

「ひなた、お前一人でここへ来たのか？」そうナビトが問いかける声に「来ないで！」と言うひなたの甲高い声が重なって洞窟に響いた。外まで聞こえてはいないだろうな、とナビトは後ろを振り返りかけるが、赤子を負うために体へ回っていた朱色の帯をひなたが解いたのに慌てて向き直り、一步踏み出す。

「来ないでと言っているでしょう！」

ひなたはまた声を上げる。耳が痛くなるようなその叫びに赤子もぞもぞと身を振った。赤子を抱きながら、ひなたは二歩ナビトから離れ、その分厩尾へ近付いた。

「お前、やはり蔵の外で俺の話聞いていたんだな？」

「だって、もうこれしか大波を止める方法はないのでしょうか？」

「島の奴らは反対しなかったのか？」

ナビトは足を滑らせるように一步近付いたが、ひなたはまた二歩離れて行った。その光景を見据えている厩尾は、突然自分の棲み処を訪れた人間と、かつてから知ったナビトという友人の攻防に首を傾げるような素振りを見せたが、構わず唄い続けていた。

ひなたは赤子を抱く腕に力を込め、そつと頬を寄せる。はらりと涙が一筋流れ、赤子の頬に落ちた。

「安心してください。島のみんなにはまじないの方法を伝えてはい

ません」

「ひなた、こちらへ来るんだ」

「あなたの選びたくなかった理由、よく分かりました。でも、他に方法はないのでしょうか？」

「正気か？ お前の子どもだろうか？」

「だって島にはこの年頃の子どもは私の子しか居ないのだから！」

ひなたはすっかり取り乱してしまっていた。肩で息をして、俯きがちにナビトを睨み付ける。赤子はすっかり目を開けていたが、泣きはせず、ただぼんやりと母親を見上げていた。

「けれど、この子一人犠牲にしたりはしません。私も共に鬼へ身を捧げます」

「落ち着け、ひなた。そんなことをすればお前は絶対に後悔する」

ひなたは首を横に何度も振った。

「これじゃないんです」

「だが、それは大波を止めるというだけの方法だ。島から離れれば、誰も波に吞まれて死ぬことはないんだぞ」

「そんな簡単なことじゃないんです」

泣く母親の顔に赤子は手を触れた。ふくふくとした指はほんのりと赤い。温かな体温が見るだけで感じられる。血が、流れているのだ。

ひなたまでの距離はどれくらいだろうかとナビトは目測する。ナビトは男で、ひなたは女だ。腕っ節で言えば当然ナビトの方が強いし、赤子を奪い取ることも可能だろう。けれど、それはナビトが本調子であればこそその話だ。ふらつく足でどれほど素早くひなたへ駆け寄ることができるだろうか。

「全てを失ってもやり直せるなんて、そんな簡単なことじゃないんです。家を、今まで培ってきたものを失って……」

感情の糸がすっかり切れているらしい。しかし、ぐずぐずと泣くひなたを哀れんでやることはナビトにはできなかつた。それどころか、ナビトは自分がだんだんと冷徹になっていくのを感じていた。

静かに、苛立っているのを感じた。

「ひなた」

「止めたって無駄です」

「気になっただけはいたのだがな、ひなた」ナビトはわずかに声音を強めた。

「お前の旦那は、その子の父親はどうした？」

その問いにひなたはぎくりと肩を震わせた。涙が止まったのにナビトは気付く。

「まあ、大方流行病か事故か何かで死んだのだろう。よくある話だ」「よくある話だなんて……」

「それに、お前元々は島の人間ではないだろう。島の外からと嫁いで来た他所者だ。島民達の態度を見ていれば何となく分かる」

「それが、何だと言うのです？」

「夫を亡くし、子と共に残されて、島が唄い出したために門守としても地位も揺らぐ。身の置き場がないのだろうか？」

「何で、そんなこと言われなくちゃ……」

ひなたはわなわなと唇を振るわせる。

「そんな簡単なことじゃないとお前は言うが、二百年前ナビトが大波を止める以前、この島は何度だって大波に呑まれてきた。その度に、島の人間はちゃんと生活を取り戻してきた。自分の失態ではあるのだろうが、ナビトはやはりまじないをするべきではなかったんだ。結局は楽な方法を教えてしまったんだから」

ナビトは自分の足の震えを確かめる。行けるだろうか。

「お前だって結局は楽な方を選びたいだけじゃないのか？」

「そんな」

「お前は死んでしまいたいだけじゃないのか？」

「私は」

「死んで良い理由が欲しかっただけじゃないのか？」

「違います」

「お前の自殺に子どもを巻き込むな。その子は死にたいなんてこれ

つぼつちも思っていない！」

「違う！」

ナビトは拳で太股を打って一気に飛び出した。距離としては大股で十歩強といったところだったろう。飛び掛るようにひなたの腕を掴んだ。足に力が入らない。それでもナビトは必死になってひなたから赤子を奪おうとした。ひなたも背中を丸めるようにして、必死にそれを拒む。

揉合いになる腕と腕の間で赤子は不思議と泣きはしなかった。男と女の呻き声と荒い息遣いが洞窟の中に静かに響く。

どれくらいの間そうしていただろうか。ナビトは歯を喰いしばってひなたの腕にしがみ付いていたが、ナビト自身が思っていた以上に体は消耗していた。力の入らない足がぬるつく洞窟の岩に滑り、体勢が崩れた。手が放れ、そのまま倒れ込む。慌てて上体を起こしたが、立ち上がるよりも先に思い切り脇腹を蹴り上げた。

容赦のない女だとナビトは感心してしまうが、実際余裕などは全くない。鋭い衝撃に息が詰まった。

ひなたは手近にあった男の拳ほどの石を取り上げると、無我夢中だったのだらう、そうすることの結果をよく考えないままに石を大きく振り上げた。ナビトは実に冷静に、けれど「しまった」という気持ちで反射的に目を細めた。ぶん、と空を切るような音に続く痛みを覚悟する。けれど、その痛みは訪れなかった。

いつの間にも移動したのか。ナビトとひなたの間に扨尾が立っていた。ひなたが思い切り降り下ろしたはずの石を小さな手の平で易々受け止める。

「扨尾……？」

ナビトは思わず呼びかけたが、扨尾はそれに応えることなくただ淡々と唄っていた。ひなたの手からこぼれた岩が地面の上でカラカラと鳴った。確かに扨尾はナビトを守ったのだ。

そして扨尾は、ひなたへ向けてその短い両の手を伸ばした。

赤子を寄越せ、という合図だった。

「止してくれ、扈尾」ナビトは首を横に振る。

扈尾は構わず唄を続けている。

ひなたは肩を上下させ、荒い呼吸を繰り返しながらぼんやりとその白い手を眺めていたが、扈尾の意図を理解すると穏やかな表情を作った。

「ありがとう、ね」

そして赤子を差し出した。小さな手に抱かれ、ひなたの子はきやつきやと笑った。

「扈尾！」

ナビトの耳元で囁く声がした。

人の選んだことだ。お前が気に病むこともない。我々も、時さえ喰らうことができるのならば気にはしない。

小さな歯の並んだ赤い口がぐわと開いた。

「待ってくれ」声になったのは「ま」という音だけだった。

カツン。

赤子の頭が欠けた。

血飛沫が勢いよく上がり、提灯の明かりに照らされた辺りを真っ赤に染める。

途端、ひなたは悲鳴を上げた。飛び散った血がひなたの顔にも点々と模様を刻む。その赤はナビトの頬に刻まれた黒とよく似ていた。バリバリ、ガリガリとおよそ人の体から発せられているとは思えない音、扈尾がひなたの子を喰らう音に辺りの温度が下がっていくようだった。

扈尾は体中を血で真っ赤にし、赤子の手を、腹を、足を喰らっていく。赤子が人の形を失うにはそう時間はかからなかった。赤い肉の間に白い骨が覗く。腹の中に納まっていた臓腑はまだひくひくと動いていた。あまりのおぞましい光景にひなたは後退したが、ナビトに肩を掴まれて再び悲鳴を上げた。

「逃げるな、これがお前の選択じゃないか」

胃液が喉元まで上ってきそうになるのを堪えながらも、ナビトはこの光景から目を逸らすことができなかった。自分があれほど避けなかった光景、自分が避けることのできなかった犠牲をしかと眼に焼き付けておかなければと思った。忘れることは赦されないと思っただのだ。

全てを記憶しなければならぬ。引き継ぐべき罪だ。

ナビトは、再び人を殺したのだから。

「犠牲が美しいものだとも思ったのか？ 生きながら喰われることに優しさがあると思ったのか？ 俺は言ったぞ、お前は後悔すると」

洞窟の中に反響して耳に届いた声は、まるで自分のものではないかのようにだった。ナビトはひなたの肩を掴む手に力を込める。

「逃げることは赦さない。お前は俺に言ったな。一緒に喰われてやるのだと」

「それは……」

「あんたの娘がすぐに死ねたのがせめてもの救いだ。感じた痛みはわずかだったろう」

それはナビトの希望でもあった。自分を慰めるための言い訳ではないことも十分に理解している。

「けど、あんたはすぐには死ねない」

ナビトは突き放すように言う。

「嫌……」

「聞き入れられないな」

手首を掴み、ひなたを尻尾の元へ連れて行く。ひなたは声にならない悲鳴を上げながら、ナビトの手を解こうともがいた。抵抗するひなたが手に爪を立てる。肌が裂けてもナビトは眉一つ動かさなかった。その体には赤い血が流れている。

体中を血まみれにし、へそのない丸い腹をさする尻尾の前へ、ナビトは力の限りにひなたを引き摺り倒した。

そして扨尾に語る。

「まことに手前勝手な申し出をお受けくださり、かたじけない。この女めもどうぞ召し上がりください。わずかばかりではありませんし、うが、喉を潤し、腹の足しにもなりましょう」

杯島の鬼【四】

わたしには兄と弟がおりました。弟とは腹違いの兄弟でございます。

わたしと兄の母は、わたし達が幼い頃に病で他界いたしました。その後、恥ずかしながら、うちへ奉公に来ていた女中に父が手を出して産ませたのが弟でございます。

その女中、名をお雪と申しましたが、その名のとおりに肌が雪のように白く、とても美しい娘でしたので、父の食指が動いたのも無理からぬこと、いえ、これは聞き流してください。

さて、当然腹が大きくなったお雪をどうするかで我が家は揺れました。それなりの金子を渡して、里へ戻そうかなどと親戚からも声があがりましたが、それに意を唱えたのは父ではなく兄でございます。

お雪は身寄りのない娘でしたし、元は男であり主人であった父のだらしなさが招いた結果であるのだから、お雪も生まれてくる子も引き受けるのが情というものだ、というのが兄の主張でした。勿論周りは反対しましたが、結局は兄が押し通す形で、お雪は父の後妻となったのでございます。

兄とわたしも、もう一人前な年頃でしたし、お雪は妾でもなく妻として店へ残れることに喜びよりも寧ろ困惑しておりました。生まれてきた子は先程から申しておりますように、男でございましたが、お雪は我が子を店の跡取りに、などと邪な考えを持つこともございませんでしたので、その後は何事もなく、親戚連中が首を傾げるほどに我が家は安寧な日々を過ごしておりました。

年の離れた弟を、わたしもそれなりに可愛く思っておりますし、それは兄も同じであったろうと思えます。

けれど……あ、いえ、申し訳ございませんが、これから話すことは決して他言なさいませんようお願いいたします。はい、約束して

頂けますか。

ここから先の話は今まで誰にも話したことはございませんので。ええ、けれどもいつかは誰かに打ち明けたいとは思っていたのでございます。

さて、我が家に不吉の兆しが見え始めたのは弟が十になった頃でございました。

あれは寒い冬の朝だったのでしようか。井戸の中で父が凍死しているのが見付かったのでございます。足を滑らせた上での事故ということで内々に処理いたしました。父には殴られたような跡があったことをわたしはよく覚えております。ええ、本来ならば奉行所へ申し出なければならぬところですが、兄が事故であると強く主張したので、それ以上はもう何も言うことができませんでした。

兄は優しい人柄でしたが、己の決めたことは頑として譲らないところがございました。跡継ぎである長男というものはそれくらいが丁度良いのでしょうか。兄の気性は先のお雪の件でも、お分かり頂けると思います。わたしは昔から兄に逆らうことができないでいたのでございます。

そして、父が亡くなり四十九日の法要も済まないうちに、次はお雪が死にました。数日前から病で臥せておりましたから、父が連れて行ってしまったのだらうとは誰もが口にしたことございましたが、わたしはお雪の首に人の手のような痣を見たのでございます。それも結局は兄が病であると言っのに従いました。

母にすぎり、さめざめと泣く弟に罪悪感を抱かずにはいられませんでした。わたしにはどうすることもできませんでした。ええ、全てはわたしの心の弱さによるもの、そう言われてしまえば返す言葉もございません。

しかし、わたしにも意地が、いえ、良心がございました。それ故に弟を店から離れたと申しましたら、納得できる方は少ないでしょう。現に、お雪が死んで好機と弟を店から追い出したのだと、周りの人間が囁いていたのをわたしは知っておりました。

後ろ指差されることは勿論覚悟しておりました。無体な仕打ちだと弟に恨まれるのも覚悟の上でございます。全てはその弟を兄から守るためでございます。

お察しくございますか？

わたしもお雪が死んで、いえ、お雪の首に残されていた手形を見て、ようやくとその事実を受け入れる覚悟をしたのでした。ええ、父を井戸へ突き落とし、お雪を絞め殺したのは兄だったのでございます。

兄がお雪に対し、ただならぬ情を抱いていたことは薄々感じておりました。勿論、弟が生まれる以前からでございます。ですから、初めお雪が身籠ったと聞いた時、わたしは子の親は兄かと思っておりました。

しかし子の親は父でございました。それでも兄がお雪を家に残すと言つものですから、兄は心の整理をつけたのだとばかり思い込んでいたのです。

弟はお雪に似てとても美しい子どもでした。白い肌に、整った肩すつと通った鼻筋、淡く色付いた唇。ともすれば少女と見間違えるほどに、弟はお雪の生き写しでした。

成長していくほどにお雪に似ていく弟を兄がどう思っていたのか、今となつては知る術はございません。けれどわたしは思うのです。兄は恐れていたのではないかと。

まるでお雪の生き写しである弟の中に、父の面影を見付けることを。

弟は店からも離れた遠い親戚の家へ預けました。親戚にはよく頼み込んで、金子もいくらか渡しておりましたし、わたしも折を見ては足を運びました。

その限りでは無碍になど扱われてはいないようでしたが、やはり肩身の狭い思いはしていたのではないかと思えます。けれども、弟は聡い子どもでしたので、自分の不自由な状況を何とか納得して受け入れているようでした。

せめて五年はとわたしは考えておりました。せめて弟が自分で自分の身を守る程度に大きくなってくれれば、もしくは五年もすれば兄の心持ちも変わるのではと思っていたのかもしれませんが、いえ、やはり兄が父やお雪を殺したなど、わたしの勘違いにしてしまいたかったのかもしれませんが。

弟には申し訳なかつたのですが、兄から弟を離せば全て丸く収まるような気がしていたのです。

油断でしょうか、はたまた慢心でしょうか、結局はご存知の通り、あの事件が起きたのでございます。

はい、兄が殺された、あの事件でございます。

知らせがわたしの元へ届いたのは事件が起きた次の日でございます。駆け付けた頃には奉行所の検分も終わり、遺体などは片付けられておりましたが、弟が暮らしていた離れにはその痕跡がありありと残っております。まるで血の海という有様で、今思い出しても鳥肌の立つような、血の香りを思い出すような、生々しい光景でございました。

そこで死んでいたのは兄ともう一人、数日前から寢床を貸していたのだという旅の男でした。顔に不気味な痣を持っていたそうですが、国中を巡っていたというその男の話をも弟は大層喜んで、自室にも招き入れていたそうです。

二人は刺し違えたように腹から血を流して息耐えていたそうです。刃物は旅の男の手に握られておりました。それ故に事件は物盗りであった男に兄が抵抗の末刺し違えた、というもつともらしいあらずじを付けて片付けられたのでございます。しかし、わたしはそのあらずじを到底受け入れられませんでした。

事件の日、兄は誰にも告げずに店を出ました。言い訳をするつもりはございませんが、それはわたしが仕事で店を離れている間のことでございます。そして、弟の暮らす親戚の屋敷を訪ねたのです。

親戚を責めることなどできようはずがございません。兄が弟を訪ねて来たのですから、招き入れない方がおかしい話でございます。

二人で話したいと申せば、席も外しましょう。次に様子を見に行つた時、部屋が血の海になつてゐるなど誰が予想できたでしょうか。弟は、兄と男の死体が転がる部屋の隅で膝を抱え、震えていたそうです。

その弟は事件について何も語りはしませんでした。それが事件をもつともらしいところへ落ち着かせた所以でもあつたのですが、弟は事件の後全く口を開かなくなつてしまつたのでございます。

皮肉なことに、兄が死んだことによつてわたしは弟を店へ戻しました。時が経てば弟の心の傷も少しずつ癒えるだろうと期待したのですが、弟の声を聞かぬままに半年が過ぎてしまいました。

常に暗い表情を浮かべる弟を、周囲の人間も最初は哀れんでおりましたが、その頃になると無関心を装うようになっておりました。わたしもどう接すればよいのか、考えあぐねていたのです。

そして、あの夜が訪れたのでございます。あれは、雲一つない明るい月夜でございました。わたしは妙に目が冴え、眠れないでいました。目を閉じ、根気強く眠りに落ちるのを待つていたわたしは、ふと人の気配を感じて目を開けました。

月明かりに照らされた障子に、はつきりと弟の影が映つておりました。

「眠れないのかい？」

わたしは恐る恐る弟の影に声をかけたのでございます。すると、弟の影は「いいえ、そうではないのです」と首を横に振りました。

半年振りに聞く弟の声にわたしは感動すら覚えたのですが、不思議と体を起こす気にはなれませんでした。

「小兄さんに訊きたいことがあるのです」

「何だい？ わたしに分かることならば良いのだが」

弟にはわずかに躊躇う様子がありました。わたしは体を横にしたまま、じいと弟の影を見つめ、「何を訊きたいのだい？」と言葉の続きを促しました。

「あの日のことです」

「……あの日、とは？」わたしは思わず声が裏返りそうになりました。

「大兄さんが死んだ日……」弟は淡々とした声で言い放ちました。

「あの日、いったい何があったのだ？」

「あの日、大兄さんはわたしの首を絞めました」

やはり、などと口にはできませんでした。

「旅のあの日は、わたしを助けようとしてくれただけなのです」

「お前、どうして今になって？」

「誰にも知られたくはなかったから けれど、最後に訊きたくな
つてしまつて」

「最後つてお前……」

わたしはその時になって体が動かないことに気付きました。首から下に全く力が入らなくなっていたのでございます。妙に恐ろしくなり、わたしは必死に体を動かそうとしますが、もがくこともできませんでした。

「大兄さんは、わたしの首を絞めながらこう言ったのです。『このままでは狂つてしまう。死んでくれるだろう？』と」

わたしは弟の名を呼びました。

「小兄さん、わたしの、何が悪かったのでしょうか？」

「お前に悪いことなど何も無いよ。お前に罪などあるものか！」

「分かりません……」

「そんな所に立っていないでこちらへおいで」

弟の影はまた首を横に振りました。

「小兄さん、わたしはもう行かなければ」

「行くつて、お前どこへ行くつもりなんだ？」

「今までお世話になりました」

弟の影が深々と頭を下げました。そしてくるりと身を翻し、わたしに背を向けたのが分かりました。わたしは必死で弟の名前を呼びました。

「小兄さん、その名は、もうわたしの名ではないのですよ」

「何を言っているんだ？」

「わたし、名をナビトと申します」

「ナビト？」

それは話に聞いたあの旅の男の名でございました。

「恐らく、もうお会いすることもないでしょう。どうかお幸せに」
それだけ言うと弟の影は解けて消えてしまいました。やっと体が動くようになり、わたしは慌てて障子を開きましたが、そこにはもう誰の姿もありませんでした。

それ以来、弟には会っておりません。もし生きておりましたら、そうですねえ、あなたくらいの子がいてもおかしくはないでしょう。あなたは、門守でしたっけ。お役目で国中を巡っていらっしやるのですよね。どこかで弟を見かけたことはございませんか。きっとすぐに分かります。兄が死んだ事件の後、原因はわかりませんが、弟の顔には黒い痣が浮び上がったのでございます。それが、酷く人の目を引きますから。

ええ、いつか出会うことがございましたら、どうか伝えてくださいます。もう一度、そう、お前は悪くはないのだと。

瞼を持上げると、空が白んでいることに気が付いた。

眠っていたわけではない。鈴村は一晩中茂みの影で膝を抱えてナビトが鬼門から戻って来るのを待っていた。「ちゃんと戻ってくるのだろっうな？」ナビトに対してそれは杞憂だろうと思いつつも、そればかりが心配でならなかった。足元の覚束ないナビトの、頼りない背中ばかりが頭の中に繰り返し浮んだ。

空を見上げ、あとどれほど日は昇るだろうかと考える。眠っていない頭はぼつととして、どうも考えがまとめられない。思考の大切な部分がぼろぼろと零れ落ちているようだ。

ふと。

鈴村はそこで気が付いた。

唄が聞こえない。あのどこか懐かしい旋律が聞こえないではないか。この三月弱、決して止むことのなかった唄が聞こえない。どんなに耳をすましても、木々が風に揺れる乾いた音と、潮騒しか聞こえない。そこにあつて然るべき音しか聞こえてこないのだ。

慌てて立ち上がると、一晩中膝を抱えた姿勢でいたためか足が痺れて鈴村はふらついた。それでも木の幹に手を突きながら茂みから這い出て、鬼門のある洞窟を見やる。洞窟はただただ暗い口を開けてそこにあるだけだった。

鈴村は木の幹に爪を立てながら、ナビトがそこから姿を現すのを待った。

灰色の空がだんだんと淡く色付き、茜色をした朝日が差し込んできた頃、沼の水面がわずかに波打った。波の始まりから色褪せた旅装束姿のナビトがのろのろと姿を現したのに、鈴村は思わず沼の縁まで駆け寄ってしまった。

「ナビト！」

「壮さん」

ナビトはその一言で鈴村を嗜めた。鬼門へ不用意に近付くな、ということだ。鈴村はぎくりとして辺りを見回したが、特に何も変わった様子がないことにほっと息を吐く。そして沼の水に足を取られているナビトの名前を呼んで手を差し伸べた。

断られるだろうかと思っただが、ナビトは意外にも素直に鈴村の手を取った。相変わらずその体温は冷たい。足下こそもうふらつきはしていなかったが、朝日に照らされてもなお白いナビトの顔色に鈴村は顔を顰める。左頬に刻まれた黒い痣がより一層濃く見えるほどだ。

しかし、「大丈夫か？」と訊いても「大丈夫だ」という答えしか返ってこないことは容易に予想できて、鈴村は代わりに「よくやってくれた」と伝えた。自然と、口をついた言葉だった。

わずかにナビトの唇が動く。驚いた時の「あ」という形だと鈴村は思った。惑うように暗い瞳が左から右へ動き、それから深いため

息が一つあった。

「何が、よくやったんだ？」

「え……？」 思いがけず鈴村は息を詰める。

「俺は、何をよくやった？」

「何がって、島の唄が止まったじゃないか？」

鈴村がそう言つと、ナビトは唄のことなど今まで忘れていたかのよう「そうだったな」と咳いて空を見上げた。だんだんと空の青は濃くなっている。それでも、うっすらと霞のかかったような青だ。「唄が止まったということは、まじないが上手くいったのだろう？」
「つまり、そういうことなのだろうな」

ナビトはいつもどおりに抑揚のない声で淡々と答えたが、鈴村は違和感を覚えて首を傾げる。何だか胸の辺りもやもやとして気持ちが悪い。唄が止んだということは、もう杯島が波に吞まれることはなくなったということなのに。

沼から上がったナビトは鈴村の手を離してゆっくりと歩き始めた。色褪せた黒の旅装束はどこか頑なな印象がある。隣には並ばず、鈴村はその背中を眺めるようにナビトの後へ続いた。

「なあ、壮さん」

「何だ？」

「唄を止めるためのまじないの方法、俺が鬼門で何をしてきたか分かるか？」

ナビトは振り返らなかった。

「いや」 鈴村は首を横に振る。

「お前、教えてくれなかったじゃないか」

喉元からすつと出てきた自分の言葉の後を追って「そうだったか？」という疑問が湧いてきて、鈴村は足を止めた。ナビトは歩みを止めず、闇の中鈴村に負われて来た道に戻って行く。

「なあ、ナビト」

「帰ろう、壮さん」 背中を向けたまま、ナビトは言った。

「ナビト」

俺は、と言った二人の声が重なり、鈴村は口を嚙む。けれど、ナビトは止めなかった。

「俺は誰にもまじらないの方法を教えてはいない。壮さんにだって、教えてはいないよ。これは、ナビトだけが負うものなのだから」

ナビトのはつきりとした口調に、鈴村はそれ以上の疑問を口にすることができなくなってしまった。

躊躇いがちに足の動きを再開させはしたものの、洞窟を振り返るさわさわという木々が風に揺れる音の中に、鈴村は赤子の笑い声を聞いた気がした。

ふと、赤子を抱く若い女の姿が脳裏に浮ぶ。頬にそばかすがぱらぱらと散ってはいいたが、地が浅黒いのであまり目立たない。二重瞼がはつきりとしていて、整った美しい顔立ちをしていた。この女は誰だろうか。

「帰ろう、壮さん」ナビトが再び言う。

沼からは水溜りの足跡が点々と一人分だけ連なっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8624t/>

ヤミ負いのナビト

2011年6月5日23時40分発行